

第14講 帝国の防衛としてのクセルクセスのギリシア遠征

従来の研究の過大評価

前四八〇年のギリシア遠征の失敗とヘラス同盟軍の反撃

ヘロドトスの記述とその印象が原因

ミュカレーの戦いの後、イオニア全体が雪崩を打ってペルシアの支配に反旗を翻し、ヘラス同盟軍を解放者として迎えたかのような印象

ヘロドトスがイオニア人の二度目の反乱と指摘していることに起因¹

ブリアンの指摘

ペルシアの小アジアでの喪失は最小であった²

アテーナイの攻勢に対してペルシア側の防衛は成功³

西方の防衛にクセルクセスは関心を持続⁴

ヘロドトスはマスカメスによるドリスコス防衛に成功したことを強調⁵アテーナイ側による成功は孤立したもの、後が続かず

ペルシアの反撃の成功：

前四七八年にアテーナイはキプロス島のいくつかの町を占領したが、その後の前四七〇年代の間にペルシアが奪回⁶アテーナイの矛先はエウボイアのカリュストスやナクソスなどに

トゥキュディデスはアテーナイによる小アジア遠征については全く言及せず⁷

¹ Hdt. 9. 104: οὕτω δὴ τὸ δεύτερον Ἴωνίη ἀπὸ Περσέων ἀπέστη (このようにしてイオニアは再度ペルシアから離反した) .

² Briant, 1996, p.557 (2002, p.540).

³ Briant, 1996, pp.572ff (2002, pp.555ff).

⁴ Briant, 1996, p.557 (2002, p.540).

⁵ Hdt. 7.106.

⁶ Briant, 1996, p.573 (2002, p.556).

⁷ Briant, 1996, p.573 (2002, p.556).

ミュカレーの戦い以降デロス同盟によるペルシア領攻撃は
なかった⁸：

プルタルコス：キモンの小アジア沿岸における活躍を
エウリュメドンの戦いの直前に置いている⁹

ディオドロス：カリアやリュキアに至るまでの小アジ
ア沿岸の諸都市をキモンがペルシアから
奪取したことをエウリュメドンの戦いに
直結する遠征に含んでいる¹⁰

前四六六年のエウリュメドン遠征の際にも小アジアの住
民によるアテーナイの攻撃に対する抵抗

パセリスの事例：自発的にアテーナイに降伏したのではな
い¹¹

西方領土防衛の成功：

前四六六年のエウリュメドン遠征の時点で、多くの小ア
ジアの諸都市

ペルシアの領域の中に留まっており、ペルシアの守備隊
が各所に駐留¹²

結論

クセルクセスが軟弱な君主というギリシア史家の批判の原

因：何よりもギリシアの最大の敵であったから

ギリシアの存続にとっての最大の危機をもたらしたから

ギリシア人に敗れたから

クセルクセスの業績

⁸ Briant, 1996, p.572 (2002, p.556).

⁹ Plut. *Cim.* 12.1.

¹⁰ DS. 11.60.4.

¹¹ Briant, 1996, p.574 (2002, pp.556-557) ; Plut. *Cim.* 12.4.

¹² Briant, 1996, p.574 (2002, p.557).

ギリシア征服より遥かに重要なエジプトの反乱を平定
バビロンの蜂起を粉砕

クセルクセスの性格は歴史的評価とは無関係

ギリシア人が描くように、本質は怯懦であるにも関わらず外面は傲慢で残酷で人としての分を弁えないそのような帝王であったのかどうかは無関係クセルクセスがどのような性格の人物であったとしてもギリシア遠征を企て自ら親征して敗北したという事実には変わりはない

帝国の根幹を揺るがすような大敗北を喫することもなかったという結果には変わりはない

そのような問題について議論を重ねても所詮古代ギリシア以来の欧米人のアジア観の是非を論じる袋小路に陥ってしまうだけ

大事なこと

クセルクセスは自らをkhshavarsha（「王の中の英雄」という意味）と自称¹³

東方の伝承では

生真面目な支配者

友人や敵に対して非常に気前良く

優れた判断を下し

恣意的に行動することはなかった

ロジャーズの評価

クセルクセスの時代は考古学的にはデカダンスの時代ではなくペルシア文化の黄金時代

クセルクセス再評価

最近の評価の見直し

全体としては帝国の統合と力強さ、決断力に優れ、まじめ

¹³ Roberts, 2006, p.95: ペルセポリスの大宮殿の扉にある碑文。

で能力に恵まれた統治であった¹⁴。

求められているもの

ギリシアの伝統的な文学と政治プロパガンダから脱する
有能な君主と優れた行政機構を持ち、想像を絶する国力を
誇る東方の大帝国とスパルタやアテーナイは対峙していた
のだという前提

スパルタやアテーナイは決して虚栄心に固まった見掛け倒
しの大軍と対峙していた訳ではない。

優れた補給機構に支えられ、経験と忠誠心に十分な信頼の
おける高級指揮官に補佐され、プロの戦闘集団を核とする
陸海の大軍を統率し、王家の伝統と使命に忠実な壮年の支
配者と対峙していた。

¹⁴ Roberts, 2006, p.95.